

ナイスの視線で、日常の楽しみをお届けする、西成発の地域情報誌

Take free!

# なっ

12月号  
vol. 142

「ストリート感」  
玉出東1丁目付近にて撮影

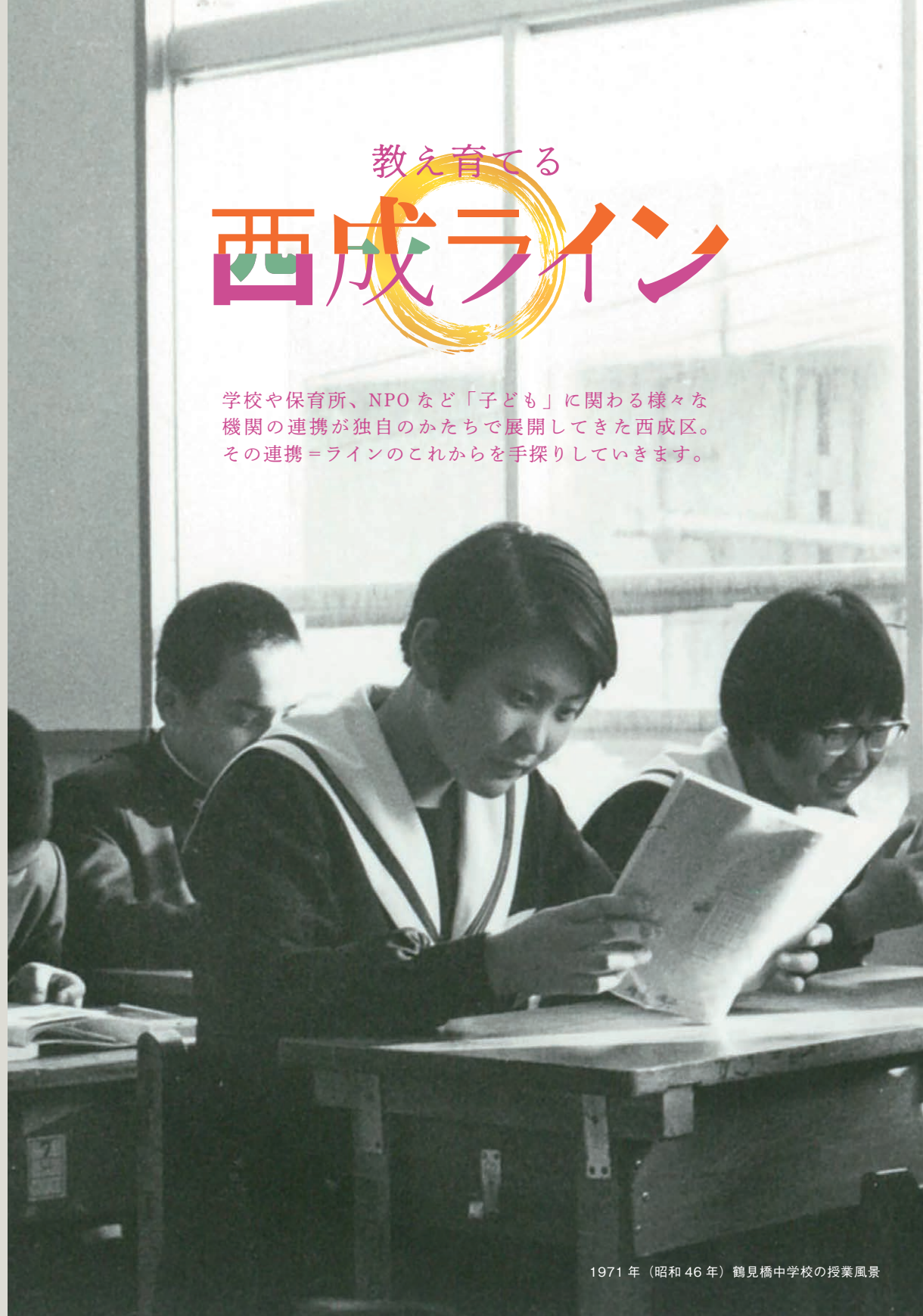
特集 教え育てる

# 西成ライン



# 教える育てる 西成ライン

学校や保育所、NPO など「子ども」に関わる様々な機関の連携が独自のかたちで展開してきた西成区。その連携＝ラインのこれからを手探りしていきます。



1971 年（昭和 46 年）鶴見橋中学校の授業風景

## 第一回 隣保事業の歴史から教育を思ふ

### ▼日本の隣保館事業の歴史

この特集では、西成隣保館「スマイルゆくとあい」（以下「ゆとあい」）が向き合うべき教育課題を考えたいと思う。ゆとあいとは2015年12月に地元の部落解放運動が立ち上げた民設民営の隣保館（詳しい経緯は、本誌106号を参照）。これまでに行政が担ってきた隣保事業を、民間の力でやってみようというのが設立の趣旨だ。

同和教育の問題は隣保事業で取り組むべき課題として古くから位置付けられてきた。いま再び、民営隣保館ゆとあいが教育の課題に取り組む理由を、歴史を振り返りながら確認してみたい。日本で最初の隣保館は、19世

紀後半の英国で生まれたセツルメントの影響を受けた民間の社会事業家が、明治後期にスラム地区対策の一環として設置したと言われている。その後1921年には初の公設置・公営の隣保館である大阪市民館が設置された。

その後、大正デモクラシーの機運のなかでちょうど100年前に生じた米騒動や、1922年3月に結成された「全国水平社」の当事者による部落解放運動の影響で、被差別部落にも隣保館が設置された。この時代、部落差別のゆえに社会の主要な生産関係から排除され、その結果、被差別部落のコミュニティ全体が深刻な貧困に陥ったという現実があった。その差別解消運動は、これら部落問題が重大な社会問題であることを広く世間に知らしめたので

ある。しかし、戦前の隣保館の事業は、融和事業という治安対策的な色彩が強かったことは否定できない。

戦後は部落解放全

国委員会（部落解放同盟の前身）が差別解消運動を再開。経済的な理由で十分な教育機会が与えられていない部落の子どもたちのために、義務教育での「教科書無償化運動」や「同和教育」を進めた。また、将来、社会で仕事に就き安定した生活を送るには教育は非常に大切なものであることから、何とか地域の子どもたち

の学力を上げようと「教員の加配」「特別就学奨励費」「サマースクール」「中学校3年生の学習支援」など様々な活動を行ってきた。隣保館はそうした地域の教育事業の拠点という役割を担うべく、同和対策事業の一環で隣保館設置が進み、全国の被差別部落に



1961 年（昭和 36 年）みなと遊園地への遠足



## ▼隣保館事業における同和教育の意義や活動

1000館を超える隣保館が建設された。

1950年代後半大阪で「ブラカード事件」が発覚した。当時の小学校では、毎月、給食費を「給食費袋」に入れて担任の先生に納めるという方法を取っていた。家庭の事情などで給食費を払えない子どもが「忘れました」と言わざるを得ないという状況も、よくある光景ではあった。しかしその小学校では子どもの家庭環境を顧みることなく、「私は給食費を忘れませんでした」というブラカードを首にかけさせ、さらに運動場を走らせるという「罰」を与えていたのである。このことに保護者や地域の人たちは憤慨した。この事件をきっかけに大阪の教育運動は大きく変化し、保育所、学校、青少年会館の建設など「外

的条件」は目覚ましい成果をあげ、長期欠席や不就学は基本的に解消され、高校進学率も著しく向上した。しかし、現在は「低学力」「高校中退」「不登校」というように少しかたちを変えながら教育課題は残り続けており、根本的な解決には至っていない。

教育をめぐる課題は、長きに亘る多くの人たちの努力によってある程度改善されてきた。しか

し、現代社会では貧困や排除、格差拡大という社会矛盾が子どもの生活に直接的に現れ、「子どもの貧困」や「児童虐待」が社会問題化している。それは私たちが関わってきた被差別部落に限らず広く社会一般に共通する問題になっている。これに抗するためには全国で取り組みが進んでいる「こども食堂」をはじめ、「子どもの居場所」や「高校を中退した

若者の進路相談」など、子ども支援の活動はこれまで以上に大切なものになっており、注目を集めている。

## ▼ゆくとあいの事業をつうじて見える子どもたちの現状

歴史的な経過から、隣保館として子どもの活動支援を行うことは当然のこととして中学生を対象とした学習支援事業「ゆくとあいの塾」や小学生対象の学習、工作等の活動「やってみよう屋」があり、それぞれ子どものニーズを把握する前に、できることから始めて、参加している子どもも落ちていた状況になり関係性を築けてきた。ただし、子どもや家庭のニーズに応じられているのか検証もしつつ、地域の長年の課題である「学力の向上」や「中退防止」の取り組みを進める必要がある。課題を持つ小学生には、引き続き支えていくようにしたい。

本当に支援の必要な子どもや保護者は、信頼関係ができていないと相談には来ない。相談会を事業として実施し、保護者と呼びかけても、それに応じて参加してくる保護者はほとんどなかった。ところが、「やってみよう屋」のような取り組みを行って関係性ができると、参加者が増えた。

しかし、中高生を中心とした若者の居場所づくりは今のところ事業としては出来ていない。学習支援やダンス教室などいくつかの事業は試みてはいるが定着しない。定着すれば、将来の地域を支える人材となる大きなチャンスだと考えている。少しずつ個人と関係性を築く必要がある。そうした信頼関係ができていくと、本当に困った時には相談に来るようになるだろうとは思いますが定かではない。学校ではどうだろう？ 学校での教師との関係も様々で、信頼関係を築ける子どももいれば出来ない子どももいる。

教師の資質にもよるが、しっかりと子どもとの関係を築いてほしいと願っている。しかし、いずれ教師は転勤するので学校だけでなくすべての子どもを支え続けるとは思えない。地域と学校が協力し、困難を抱える子どもについて、幼い頃からの自分を知ってくれている大人が地域にたくさんいれば、その子はきっと安心するのではないだろうか。

今、「ゆくとあい」では、水曜日に識字教室、木曜日に日本語のみかき教室を行っている。識字教室は解放運動の教育を語るとき教育事業の根幹をなすもので、差別が原因で経済的困難を抱え学校に行けなかった結果、文字を読むこと書くことが出来なかった高



上：「子どもフェスタ」科学実験体験 下：子ども和太鼓教室

上：「やってみよう屋」工作の時間 下：学習支援の様子

齢者の皆さんの文字を取り戻すための大切な学習活動である。

日本語教室は最近日本に来た韓国、中国、ベトナム、フィリピンその他の国から来た方の学習を無料で行っている。この教室は今後も館の大事な事業として行う。元文部科学省事務次官の前川喜平さんが言うように、全ての人が教育を受ける権利を有しており、社会がそのことを保証することが大切だと思う。教育に関わる幼児の読み聞かせや小学生、中学生の学習支援、けん玉、「やってみよう屋」のようなレクリエーション的な事業、文化や伝統を次世代に伝える活動、食事会等の居場所には人材の育成や豊かな生活を営むために大切な活動であり、地域ですべての人が学ぶことのできる環境整備を行い多くの人が自分にあった事業に参加し学ぶことを隣保館の大きな仕事として日々進めていきたいと考えている。

文責：寺嶋公典 寺本良弘



# にしなりもん

西成にもまだまだ発掘されていない文化資源・社会資源は存在するはず。これら西成産のモノやコトを「にしなりもん」と名づけ、その由来やエピソードを辿っていきます。

## 年中無休の喫茶 「あとりえ」

今回ご紹介させていただくのは鶴見橋商店街4番街にある喫茶「あとりえ」。前回もそうだったが、取材をお願いするときは少し緊張する。マスターに取材をお願いすると、とても素敵な笑顔で快諾してくれた。

喫茶「あとりえ」の営業は40年以上前。なぜ西成で喫茶店をしようと思ったの



かと聞くと、西成で生まれ育ったからという理由が一番大きいようだった。

店内は広く、落ち着いた雰囲気。壁には70年代・80年代の洋楽のレコードや絵画などが飾られていてオシャレ。常連さんがとても楽しそうにマスターに話かけていて、マスターの人柄の良さがあらわれていた。

注文したのはホットコーヒー「あとりえマイルド」とアイスクリーム。コーヒーは甘い香りとまろやかな味わいが特徴でアイスクリームと相性ばっちり。アイスクリームもバニラアイスの上にホイップクリームにコーンフレークがあり、チョココレートソースがかかっている。味もおいしく見た目がかわいく、なんともインスタ映えがしそうなアイス。コーヒーのメニューがとても豊富で注文に迷いそうになるが、品名の下に味



の特徴が書いている。そのときの気分でチョイスしてみてもいい。モーニングサービスは午前6時30分から11時まで、トーストにゆで卵、ホットコーヒーがついて330円とリーズナブル。最後に定休日を尋ねるとなんと年中無休。お正月も開いているそう。

西成でちょっと一息ついて、おいしいコーヒーを飲みたいときはぜひ立ち寄ってみてほしい。

### あとりえ

住所…西成区鶴見橋2の11の14  
定休日…年中無休

## 「だいがく」のある 生根神社

お正月が近づいて来て、神社に行く機会が増えるこの時期。大阪には住吉大社など有名な神社がたくさんあるが、西成にある神社をみなさんはどれくらい知っているだろうか。「あとりえ」に続き、西成にある神社の1つ「生根神社」を紹介する。

地下鉄四つ橋線玉出駅から北へ歩くと見えてくる生根神社。7月には毎年夏まつりがあるので、行ったことがある人も多いのではないだろうか。夜に立ち寄ると、幻想的な色にライトアップされて本殿の柱の赤と樹木の緑のコントラストがとても美しい。

生根神社ができた時期は詳しくはわかっていない。昔は住吉大社の料有地で住吉大社摂社であった奥の天神から、少彦名神の分霊を迎えて、玉出の産土神としたのが始まりらしい。

大阪大空襲で社殿を焼失したが、神体は住吉の生根神社へ移したため無事であった。戦後仮社殿を造り、1966年鉄筋コンクリート建築の社殿や社務所などで再建を果たした。

生根神社には「だいがく」がある。「だいがく」とは昔から雨乞い神事に使用され、高さ約20mの柱に約70個の提灯を飾り付けた櫓。残念ながら祭りのときの2日間しか見ることができないが、大阪府の有形文化財にも指定されている。

「だいがく」が見られなかったのは少し残念だったが、たまには神社をブラブ

ラと散策するのも悪くなかった。

冒頭にふれた夏祭りは毎年7月24日・25日に開催されている。さすがに来年の夏までは少し時間があらずいざという時はあるときにふらっと寄ってみてはどうでしょう。

### 生根神社

住所…西成区玉出西2の1の10  
アクセス…大阪市営地下鉄四つ橋線 玉出駅 北へ約300m。南海本線 岸里玉出駅 西へ約400m。



【沖田一志】私はPC本体や職場が変わっても同じ型番のキーボードを2000年頃から使い続けています。今使ってるので2代目、新品の予備も購入済み。ノーブランドの普通の109キーボードです。



【佐々木敏明】秋ゆく手ポケットにいる始発駅捨ておかれ汚れた軍手の憤り日を次ぎてわれ彼岸まで親し距離



【田岡秀朋】てんしば、大阪城公園は民間活力を導入した公園の商業化。生駒山麓公園は障がい者福祉施設が占用する公園の福祉化。公園法も変わって、もう一度「公」の意味を考える機会かも。







長野公園に勤務するわたくし大門が、勤務地や My フィールドに棲む生き物の生態や豆知識などを紹介していきます。実用的な知識だけでなく生き物好きな人間の私的な関心も多いかも。どうぞお気軽に読んでください。

vol.2

晩秋の収穫人  
クロナガアリ

立冬を過ぎ、季節は冬。といっても今年はまだまだ暖かく日中は陽気でポカポカしていますね。寒暖差が大きいため着る服に悩む季節ですが、本格的な冬が訪れる前に冬支度が必要ですね。さて、今回は私が愛してやまない生き物の一つであるアリ類。その中でも晩秋から初冬にかけてよく見かけるクロナガアリについてご紹介したいと思います。

クロナガアリ（学名：Messor aciculatus）はハチ目アリ科ツタフシアリ亜科クロナガアリ属に属するアリ類です。本種は日本を含む極東アジアに分布し、日本国内では本州・四国・九州・屋久島に広く分布しています。平地から山地にかけての陽当たりのよい開けた草地や裸地などに生息していますが、都会では稀です。

大きさは5mm 前後、体色は黒色でありパツとしませんが、日本に生息するアリの仲間としては中型に属し、同じグループに属する他種がないので比較的認識しやすいアリの一つです。そんな本種の最大の特徴は植物の種子を集めること。そして、その習性から本種は日本版「収穫アリ」として知られています。一般にアリというと雑食性で小動物から植物の種子、蜜など何でも食べるイメージですが、本種は雑食性ながら餌のほとんどをイネ科植物の種子に依存しているという変わり者です。また、本種はほかのアリ類と異なり、専ら地中活動性で収穫時期である秋から初冬の期間を除いてほとんど地上に姿を見せませんが、たま

に春先に姿を見ることがあります。そのため珍しいアリだと誤解されがちですが、市街地の公園など攪乱地（造成などで一度掘り返されて攪乱された土地のこと）においても出現時期にはわりと普通に見ることができ、種子を持ってせっせと運んでいる姿が見受けられます。私の職場である長野公園でも普通に見られ、毎年種子を運ぶ本種の姿を見るのが楽しみになっています。街中である西成周辺にも生息しており、過去に私が観察会を実施した際には西成公園や千島公園でも確認しています。

大好物の種子が実るこれからの季節、来たる冬に向けて家族のためせっせと種子を収穫する彼女たちを応援せずにはいられません。みなさんもぜひ足元の下でクロナガアリが種子を運ぶ姿を観察してみてください。



## 福井 龍磨(ふくい りょうま)さん

鶴見橋商店街となにわ筋が交差する北西角が福井さんの職場。今年の5月に東京から大阪にきて入社し、まだまだ見習いだけどパソコン、ホームページ、事務機器までの受注や設定をするのがお仕事。

「人の命と戦争」に関心があるという福井さんは、戦争をテーマにした本をよく読んでいる。また、社会課題や命を目の前にして、自分にできることとして、釜ヶ崎の夜回り（毛布を配る）や炊き出しなどのボランティアにも参加しているそうです。今回はガチャピンなおとなりさんをご紹介します。



今月のお隣さん  
孤立をおそれず、紙面をつなげる地域の輪

たぐの 3くふうたま  
6 間  
2  
はうふ

モノが多い。「残すべきもの、置いていくべきものは何か。」

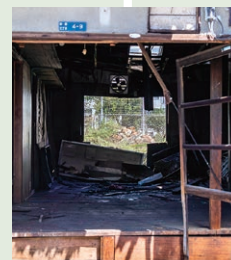
ことは恐らくそう単純ではない。今「ある」ものには、残しているものと残っているものがある。このうち「どうしようもなく残っているもの」は、新しいものを生む以上、その改善も一緒に取組みたいところ。枯葉も肥やしにならない「まち」では、仕舞に残ったものが溢れて、それが煩雑になる。煩雑さがタヨウカなのか。タヨウカは大切だが、意思を持って置いておくものを決め、なんとか最後はきれいに迎えて欲しい。

例えば近所の木造空き家が、台風で道へ倒れかけたまま、はや1ヶ月半。取り壊せない理由はきつとそう単純ではない。

一方、毎年の秋の大阪では、築40〜50年を越える、特に市内中心部の大阪時代を支えた商家や財界人が建てた洋館達が一般開放される（生きた建築ミュージアムフェスティバル）。今も愛され現役で活躍するその姿に何とも言えない奥深さを感じる。さらに、それも人が価値を認め、「残す」と決めない限り、単なる残り物になる。

今はモノに増して「コト」も溢れるが、取り付く島がない。さあ、今年も苦手な大掃除の時期が近づいてきた。（安田拓也）

荒れ果てた空家のゆく末はいかに



ハナレバナレになった人とまち。くらしの窓から、紡ぐヒントを探してみる。



【安田拓也】「オープンナガヤ大阪」古い長屋を改装し、暮らしびらき、商い、小さな図書館だったりと思いを表現する。『家は暮らしの宝宝箱でなければならない』ル・コルビュジェより



【西田吉志】10月27日の「RUN 伴」に参加した。1キロほどの距離を徐々に全速力で走ったけど…あのね、やっぱり日頃から運動をしていないと急には走れません。ちょっとずつ運動するようにしよう。



【寺島史視】今年は元気に1年を過ごそうと思っていたが、先月に体調を崩してしまった。天気の寒暖差も影響しているのだろうか。残りの1か月何とか元気に過ごして来年に向けて頑張りたい。



【谷口円】最近外出時、かなりの確率でカレーを食べます。辛すぎないスパイス系のカレーが好きで、中津のSOMAや本町のボタニカリーなどが好きです。オススメカレー情報があればぜひ谷口まで。



「社会を知って」「社会に踏み出す」  
そんな L's College Plus の取り組みを  
紹介していきます。

vol.8

## 話し上手は聞き上手

あります。何よりボールを使って視覚化して挨拶をしてみると、自分の話し方を意識することができて、相手のことを考えながら会話することができます。

練習では上手にキャッチボールができて、日常になるとボールの投げ合いになったり、1人の職員に3人が同時にボールを投げることもありますが、SSTを通じて、社会で生きるコツを身に付けてもらおうと取り組んでいます。

(文 松尾 有希生)



# はらすアルファ

講座の一つにSSTというのがあります。Social Skill Training (ソーシャル・スキル・トレーニング)の頭文字を取ったもので、日本語では「社会生活技能訓練」と訳されます。簡単に言うと、社会で生活するためにコミュニケーションのコツを身につける練習です。

エルズ・カレッジプラスでは、お話好きの利用者が揃っていて、話したいことは熱心だけど、聞く番になると興味のない人が多く、会話のキャッチボールが一方的になることがありました。そこで会話はキャッチボールということを実感してもらうため、実際にボールを使ってキャッチボールしながら、会話をしてもらっています。

声の大きさや、話のスピード、話し方の強弱の大切さを感じてもらうために、例えば「おはようございます!」と挨拶しながら、キャッチボールしてもらうのですが、声(ボール)が小さすぎると相手に届きませんし、逆に強すぎたら、相手が受け止められません。早口(速いスピード)で話しかけたら相手が聞き取れないことも

10月21日(日)に「西成区民体育レクリエーション大会」が開催され、長橋連合町会として参加した。長橋小学校の子ども達25人、鶴見橋中学校の生徒8人と地域の青年、町会役員、学校の先生方合わせて80人ほどがチームになった。前日からテント張りや弁当の準備、飲み物の手配など多くの方にご苦労をかけた。

私は初めての参加で様子がわからなかったが、優勝した橋連合町会は5連覇を果たしたようだ。他の常勝の連合町会も大会前になると集まって練習しているそうで、大会に臨む態勢が整っている。今回、長橋は8位になり、6位入賞までもう一息のところに来た。若い人たちの参加が多いと成績も上がり練習もやってみようという気にもなる。組織の活性化や地域に暮らす人との日々の交流が大切だと思った。

(寺本良弘)

# 皮算用 胸算用

にしなり隣保館の館長が日々の出来事について胸のうちに皮算用していることを語っていくよ。



## 外国人が増えて日本がおもしろくなる

# い湯かげん

政府は11月2日、単純労働を含む外国人労働者の受け入れを拡大する出入国管理法の改正案を閣議決定した。建設や介護、宿泊、農業など人手不足の分野で一定の技能を持つ人を対象に新たな在留資格「特定技能1号」は「一定の技能」を持つ外国人で、在留資格は通算5年、家族帯同は認められない。「特定技能2号」は「熟練した技能」を持つ外国人で、在留資格の延長可能かつ家族帯同が認められ、10年すれば永住権の資格取得要件を満たすことになる。

外国人労働者はここ5年で60万人増え、128万人に達したから、日本はもうすでに「移民国家」な

んだが、およそ無法国家だと非難されている。外国人が無法なのではなく、日本の企業などの処遇が無法なのだ。あちこちで人権侵害や労使紛争が起きているが、外国人側が泣き寝入りしている。人手不足が深刻で外国人を受け入れたいが、さすがに処遇を改善しないと来る人も来ないということから、今度の法改正になったのだろう。だから、野党が「まず現状の改善が先だ、溝を浚えてから来い」というのは正論だ。だけど、「浚えなきゃならない溝」はもともと昔からのことだ。日本は旧植民地出身者への社会保障の「内外人平等」が遅れて、いまでも完全ではない。地方からでも選挙権を認めるべき

という議論も止まったままだ。だからボクは、溝浚えと受け入れ緩和は、同時並行して進めて良いと思う。どうもボクには、この問題も改めて揺れる障害者雇用率も重なって見える。霞ヶ関はそれこそ有史以来障害者を排除してきたのだから、「これから毎年障害者を採用すること」で夢や希望を与えたいから、雇用率はちよつと待ってくれ」ぐらい言えないのか。同じように、在留資格云々の前に、植民地政策の反省も踏まえて、外国人と共に新しい日本を拓きたいぐらい言えないのか。野党にはそんな議論を吹っ掛けてもらいたい。

ちよつと突破な話になったから矛を収めよう。ボクは「家族帯同」から議論すべきだと思う。労働力ではなく「生活者」として外国人を積極的に受け入れるのに、家族を置いて来いなんて言語道断だ。保育所や学校、日本語教育、就労支援、年金が掛け捨てにならない措置など、山積する問題の議論を急ぐべきだ。負担が増える、秩序



富田一幸

人間のしあわせ、福祉のあり方、そして新しい社会の結びつきを求めて、これから「いい湯かげん」のテーマ探しに出かけます。



[若松司] 親の世代同士の話に聞き耳を立ててみると、交わされる言葉の向こうにある世界の分厚さに圧倒される。柄谷行人と大江健三郎の対談にも同じものを感じた。豊かな時代があった。



[山村裕太] タバコをブルームテックに変えようか悩んでいます。一度吸いましたが、すごく軽いので吸っている感じがあまりない。しかし、匂いがしない+煙がでない。どないしょっかな。

地域の縁を心でつなぐ

## 松崎 心 心の時間

ある有名なお坊さんが「家宝にするので、ありがたい言葉を書いて頂きたい」とお願いされたそうです。するとお坊さんは「親死ぬ。子死ぬ。孫死ぬ」と書きました。もらった方が「縁起が悪いから書き直して欲しい」と頼むと、お坊さんは「良からう」と書き直した言葉が「孫死ぬ。子死ぬ。親死ぬ」でした。「どうし

て『死ぬ』ばかり書くのか。それも親から順番だったはまだ許せるが、孫が一番先にくるとはとんでもない」と怒ると、「別れは辛い、年を重ねて親から順番通りに死んでゆけるほどありがたいことはないのだ。それを分らせる為に逆から書いてみたんだ」と答えたそうです。

先日ある青年が親と子供を残して亡くなりました。「ありがたい、おかげさま」は順調な時には軽く言えますが、悲しい時には言えません。それでもこの現実から逃げる事が出来ないならば、いつの日か「ありがたい、おかげさま」と言える日が来たら良いですね。その時、悲しみを乗り越えて行く一筋の光が差し込むように思えます。

松向寺 通法

### クラブが休みの日は何をして過ごすんだろう？

「働き方改革」はもちろん教師も対象になり、中学校のクラブ活動も制限を受ける予定。具体的には、土日のどちらかは休まなければならなくなる。ただ、大会前にも関わらず、土日練習もできないことになる。大会に勝ち続けると、ずっと練習ができなくなる。

クラブ活動は、クラスや担任に馴染めなくてもクラブの顧問や先輩後輩とは関係性をつくれたり、お互いを支えあったりチームワークを築いたりして、こどもが活動を通して人間関係をつくる大変大事な取り組みである。

それがなくなるとどうなるだろう？ こどもたちは勉強やボランティア活動、家庭でのんびりする時間を過ごすだろうか？ 体力を持て余したこどもがコンビニや隣保館で「暇や暇や」と嘆いたり、家でゲームをして時間をつぶすことにならないのだろうか？

それなら、クラブが休みの日は隣保館で基礎体力づくり講座をすること、クラブ活動の応援と地域とこどものつながりづくりにもなるのでは？と思った。

# COUNT 2.99

隣保館などで事業を行う中で感じたことをつぶやいて、西成のまちづくりに役立てていきます！



ナビ編集長 寺嶋公典

smile  
ゆーとあい

にしなり隣保館

にしなり隣保館「スマイル ゆーとあい」は、地域コミュニティ全体が抱える課題の解決をめざす民設民営の福祉施設です。日々悩んでおられる困りごとはありませんか？お悩み解決のためにできることをいっしょに探しましょう。

ナビ 12月号 (vol.142)

発行日: 2018年12月1日 (創刊日: 2007年1月1日)

発行: 株式会社ナイス

住所: 大阪市西成区長橋 3-6-33

電話: 06-6563-1156

E-mail: info@nice.ne.jp

url: http://www.nice.ne.jp/

編集長: 寺嶋公典

編集: 沖田一志、佐々木敏明、岡田秀朋、

寺島史規、西田吉志、安田拓也、山村裕太、

若松司 (あいえお順)

イラスト: hidarimaki デザイン: 谷口円

facebook: <https://www.facebook.com/navi.nishinari/>

facebook

